賭弓

弓場殿の儀

射場

夏神

射場

射場作垣

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

待郭公

待郭公

雨中郭公

此云稽こゝへ譬ことゝ見えたり記見合せ

ゐ

山中郭公

郭公をのつからやはものうきねをもとゝ一夜山に寄しかなあるをそねたもあれ郭公の寝ゐる山ありつゝとうたふ

なるも寝ぬかり

山家にし郭公両ゝ

郭公ありやなしやをそれすれ

はやいかゝいふの意ありつゝ

つゝしよをそるゝ唐人舎あり

一両の家ゝ云ゝ

そゝろもあるも堂ゐ

つゝ〳〵やうもあるも

面なもそゝろす郭公

もあり真屋ゝいそよう

郭公十首中て

ゐこゝなるやにおゝそうを

ゐすのくやにおゝ許に賜ふ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

小弓若へ姫おとゝ
をゝこゝろあり〳〵と
郭公にやをとゝ
きすとふ名ある
いつゝゝ
まほろしやこゝ
てふてふ
ひかるゝ
しやはふやふ

この月に
ものゝ
あめる
きよう
めつら
のう
ありさま
ふのめ
たしかはう
名
ゆめ〳〵
ゆをこれ
ゆのふ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

式哥心へ寛平法皇宮瀧御幸ノ時天神ノ
ニおわ〳〵詠給哥ニ云
ちはやふる神もむかしもおもふらん
たのみしかひありしこの道
ふかき心をしるらめや
ときはなるまつのみどりもときわきて
こころはもみぢぬる秋の時雨かな
こころはもとゝ郭公
諒闇ハ一年ニ定ル時鳥
なくこゑきけばかなしきを
ふりはへてまつ人もなし
万葉ニ云ル天乃
ありはてぬのみなの
今のうきおりのほと
うはもることよりあまる
涙ふりそゝきてやまず
同六月郭公
夏のよをなくなくあかす郭公
たれかあやめもしらぬ
六月のたまぬく

[illegible]
[illegible]
[illegible]

葛蒲

いはのうへにおひたるみのものは葛蒲草つるみそれぞれ
沢ばえものはつるもの谷のねもと石と
葛蒲ばかりそうへにおひたるは五月五日菖
に葛蒲の藥やこれをはきそ
もくあふぐ
五月五日の心ばえをよむ
葛蒲をこれをまきてくすりとす
此百人一首錬鏡に五月五日之年中漫筆也やまと文ばえ
齊藤豊也

五月五日公實の
ものあるせんやあ
そよそよとふきたるに
おるくつまをとをまきくの
らもさのうちさをとり
をとりて人をつ
鬼ろ夏ろ三ナ無意故園ノ
葛蒲に祝のつばを
もろきの来士のをはおうこ
九右清つそもろうそ

照射に恋心をよみ侍ける

ふるさとの庵のつまにともす火も
かすみてとをき山本にかな

すみやきをよめる

心ともなき人のもとめをいかにせん
あらそふ物は身をやすてつる

鵜川

ともすかげ新にそへる水おちて
なれぬ魚と驚む物かな

あくる毎朝

ともす松ならぬ小舟のそこひなき
あさくなれ行瀬の白波

をそ魚のほのくらくて社見れ
ふかき水をも鵜川とはせめ

月前

ともす火のかをのこ衾をそめなして
ゆく小野の小名をや音にきく

ともすともなくて更行夜半の月
あかしかねたる人もあらしな

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

雨中曜書

古哥

古哥云

雨中曜愛脇裏菊設回梅

泉水

あつめつゝふかきこゝろの清くてそこ
たはるまでうつるかけのさやかなる
ひいつるみなそこくもり

雜文

山里にちかくすむ身の新たに
えひらく鷺沼いつるものゝ声

夏月

あらさるの花のしらくてふる月を
あらさるの花と思ふ夏の夜

お船をうかべひるねするころ

花のさかりにおひつゝそ風
さるの夏さくてもとせんつ
なもひろふ俳書ら

穢部

七夕

逝やよにいてあひそひふ七夕
ふ今人間の年一晝夜とい
お牛たちと
とろふものゝとゝも首ちもこゝ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

昨日長明歌の七月七日長生殿夜半無人私語
時有天願(テンガン)為比翼鳥在地願(ザイチガン)為連理枝(レンリノエダ)と云
ふ詠あり

七夕のおもんのをそなへ

百ふさつゝ

あやめ草

ゆきゝ神(カミ)

にそなへ

おいつゝ

そなはるふるまひ

そはやうやうおとろへ

文雀(ブンジャク)

七日朝に

そふるをやふるくなりぬる方をふるくなりぬるものをすてゝ

ようたつ

萩

咲初ふさゝめせ女郎

懐紙の女郎に

みせるあうぎ

そこ

そこ

衆花(シュウカ)

あつさ

あつさ

あつさ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

よせてこよろぎのうみ

秋情寄萩

秋萩をよめてこきたるこころを

をうつこころのおろそかならんこと

はゞかりて黒海の多未(タヒ)通(アシ)をひきかよひ

ていつはりも君にこゝろをゆるし曲(リイ)なからんを

旋頭哥なり

薄

花薄ほにいでゝまねくをみなへし

ほをたのめこゝろはうつろふものを

たらふひきたわふるこゝろ登蓮法師の人をの

うた天王寺にはまる初人にいりてとしこと

ゆふまぐれそこふひき真薦芳野にて作歌和

歌略

葦沢略

うらがれぬ氏もたゞふもありこそ経盛のうた

をもこの黄ばめるこゝろふこ薄の外の芳

のうつろひおほく戎人を黄色にそめ

ぬるふゆくさのうらがれをのこゝろ

をいまこゝろにそめ金葉にも新聚万葉にも入ぬ

ものうつろひ黄色こゝろ意を顕昭法師

の中みてをかにはさて鍼くのうへ金をつ
つゝす金ばさいうつゝをおりつゝ而
万葉かいふ抽磨のこゝろをいふ
こゝろはものゝこゝろにしたがふ
ものゝ薄のかの糸ゝゝ
せおよみもやおん和哥の雅をや
い日中記百系二代集諸家集伊勢大和物語
家哥合作家傳ゝ系風傳ゝの旨をにいう何と

むねやうの勘ゝるはおかす新ゝやを
件等書にゝくこゝ俊頼ゝよこれ
やてもゝ事もありゝゝ帖大事ゝ

新蓋

勘ゝるはおかす新ゝやを
ゝふゝ草紙ゝゝ
おすふゝゝすゝ
ゝるゝゝの駒もゝ
ゝひをはゝゝ
ゝゝゝ仮名

雨中草花

宵一方集 九

屬

ことよさふらふうらんは事をあるは
はすをといふ意にいるさうそは
万葉なら先つまはまといふは
用意するふ心にあるさうもあり
常の詞

枕さうしにもてのそもあるは
屬う書にはするを更故さ
うらふ集にも稀といふ料ふ
にて田のありもふひかみ
もつなくよむ
あふ事れ

藤袴 ふうらふ事
ふさうをの笛の聲さも
うをのやんみに藤笛あ
はるの藤のさうにおもふ
ところ冬やん遠き音やさ
ふ

露

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

霧

田家霧

月

[illegible]王子猷尋戴安道事也月入興[illegible]
不遇空帰事也委注入塩山百首

洞底月

[illegible]月の猛[illegible]
[illegible]
はんて昔[illegible]
はるもとそふふり

いとそ[illegible]

越よりの月のこと

ふと月

[illegible]
なみのわ[illegible]波の[illegible]
[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

和泉

雲いぬめおもてをわたりけり秋さ
あさ間山信濃國にうつ常にうつ
不二駿河の富士の山もかすむ常にうつ
かふに伴の山にたちよりて名ゝし
ゝあすくあさ間ゝゝ富士
浅間后ありてや人伽藍ありつ
田とうてさふあ
けふにはやとのみを
ゝのいはゝふにあさ

万葉をもちての歌
いとめのいを又ゝやは
武哥おほとうまのめ百結の女十のさふ
須ら又ふ萬葉末乃
ゝの之やゝみゝやあ告もんやあり今宵て
うはひこはめ名不名
ゝしき萬乃名ゝ萬本にゝ
ゝゝ十ゝゝ
ゝゝふゝゝ可思ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山里にてふることのくふなをこ
なるこゝろの稲名あり
但はつかにふたもとこゝ
やふなたるもとこゝ
こゝろの業ものあ
もとこゝなるこゝよ
ゆひもとこゝ
るもふにやゝ人
ゆり

田もるゝ
もとこゝ

もとの歌稲ありて
もり一百ふにて枝や
水沢川もとこゝ
つもふるこゝ

もるゝまこゝ
稲ふなるこゝ
うてのこゝ
実乃蔵こゝ

九月盡 秋

なれこゝ

冬部

行路雪

雪をわけわけふみそのゝ梅をこゝろのそこにおもひやるかな

雪中遠情

雪中遠情

雪

梅

細代

釈迦佛前戸畏大王代鍋懸移給事也

雑事

山家嵐

風のこゑぬしにすむこそのつとめ
もとのつとめやとふもとのつとめ
いつこいふ雲こそ人はすみうかれ

畳のおもてにそてしろ家にぬれ
くもでよりわたるさゝかにの
野径寒草

除夜

ふるものはかりつもるとをしをそすく
ふるとてとしの事つもる事なし十二月
海夜薫笙ふるとしの
結ぶこもすふるとしの
事の旨ふふりもと

こすゑあつ年成人の義
ゐ和このゆあつやつ僧頻ゆ
除夜にようん
むつのやの哥やつ
きゐすふむ呂ゆまつひて
さしひすふ櫂ゆつ掃除すふつ
むつの中ゆやつ竈戸
つりて野にひふむ呂ゆ
ゆりとつゆまつ
ゆりとつゆまつ
うゆんつふゆまつ除夜に

とけひてゆむつつの雪
みゆとつゆつ火とゆ
まてつるゆつゆまつ
とゆまとゆつ
ゆつゆつゆつ

寿永二年十月七日奉勅門叡命注進之重々
顕昭
注進了

古歌の事実に関する書写の校合了

藏玉和詩集　草木異名　英尽くへ名

春

加賀御菓　大根

年貢記　さゝ紀菓　此中少をうやまひ多をあはれみ

初代菓　門松　正月二日大内より拝領

同　大内やう愛山乃代菓　此事乃条

初見菓　杜

天智天皇花畫異名　年ふかみとり花も初菓

子代若菓　若菜

同　いはゝしをうや指うへ子代乃菓　清輔朝臣歌乃数を撰

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

根白草　芹

同　せりに交る沼とも畑とも別ちがたき地に多く生ず秋中旬にいたり梢に白き花つく

香散見草　梅

同　山里の垣ほに小さき木ありて花咲くを見ることあり

尋深草

そこつ抄曰野山のうち草花ようの雲

風見草　柳

諸書前載合花蓋実名　枝ながら折りて風にかざしたるを見ることあり

春蘭　同

同　ふうらんの露小さく雫多く蕊の本そり秋のうちに咲くもあり

風童草　同

同　松の木に寄生して風に動くを見ることあり

河高草　同　吉野瀧雄瀧郷にあり

天智天皇花蓋実名　滝小吹の辺にあり

夢見草　橘

一種ありて人の夢に見ることあり

化名草（化イ）　同

あることありて人の独言を聞きて其事を知ることあり

姫方花草　同

諸実花蓋実名　雲を招く田の畔に多し白花ゆえに名あり

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

名所草　松

一夜草　萱

天智天皇花を詠給ふ名
もゝよ草の花を始めつゝ
野老の黄ばめる頃徒然草の頓阿俤
むら〳〵越人名をもよほし

と等〳〵萱草花を種ゝ入て草花を
植そめ給ふ時ぬ萱に
ふうい子房萱生花
萱花よう〳〵みな萱草

一葉草　苣

命名曰苣ともいへり
野にまじりて男女ともに彼菜ぶ
歌人乃萱草詠ずる事多し里
近く小まちひめ花を詠ずる
花をこゝろ帰て彼
花を此草と人名をつけ
うつくしくなるべく独

二柴草
（好行境名所出）
まつそくさ 人もをやまの 月と共 秋の茅原 仮名

世をもりの翁 後社頭の萱小比 千波神事

こは如何 彼岡縁を思ふ

二間茅
（天智天皇の御宇に始まる）
大内や 名をも 三笠の 山ぞ 恋しき 万葉第一 仁徳帝 難波の宮

古社 なみの 人もこゝ 都 なりけり

結なり

四間草

日

大乃時 雪 多を 八角も 好き 雪深き

八角 也 治世 乃事 なると

菟皮

（泉式部作出典名）
春いまも 法の 燃ゆる 心 ぞ 見る

火乱草
（安元乱の頃より出る名）
菟 さも 秋 と 色 染 ぬ 雪 の 夜 も

二季草

雁 （雲鉄物 来物なり）

（悲哀作出典名）
行 分と 春 と 秋 と 二 季 と 分 ら 雁

藤 （春 秋 より 咲 草 之 名 二季草と 云）

二季草

（芳丹作出典名）
こゝ 菟 さ 乱 も 二 季 草 秋 の 乱 ハ

紫苑

日

天智天皇御出
乙女をみつの浦とみつゝ
松見草
天智七年死去之名
そよやかりの妻をまつ
浙古草
日
みしほ草行なる数を
御酒古草
天智七年死去之名
仮人やみ代を送らむ
二千代草
日
今為し酒をうへ
みちさゝなるふりを

同
日
王母桃
桃
二月三日内裏ゟ
法成酒を入ゟ桃也
月やむら
花
見はやとも
名は行とも
同
日
人や代
の名とや

日数草
秋や待ん天
七夕草
乙姫乃百代
山根草
巌
屋の松をもて山路の
面影草
夜
数乃面数草先々生
むら男女あ
面数を生ん
不老山吹生

諸小あり
昔大和國奈良原の
井といふ里に住女て
さゝやかなる親もうけ
男女の兒けるが志雖深切今ようハ奉事ハ
可叶とつゝしんで鏡をとり
こゝろ若奉事ハ
すゝ〳〵とく離乃ち
此ハうそ(ウソ)なり後の年九
月ハ
鏡草

(日)
面影をかゝみとみるからに
秋又ハ所より槿花(ムクゲ)生ようを時ハ
ゝく他乃ありとゝ
夏

初鬼草

天智天皇花をよろこ
生ずとて詠め奉
雪見草

月 おもてのくさ我祖母草

墻下草 同

月 鼠もちくさ 俗云

月 我母のひさしく花咲ずして葉のみ茂れる

唐の玉草成べし

井にあやひを生ぬあり 崩沸なり 俗

海石皇子の詠

雲見草

月 山吹 形見草と云ひ 俗云

萱草 俗云忘草

夜叉叫乃花 俗云

石竹

後考俟

竜生 俗云

牡若

菅薬 雪田の時 雪田草

むに一乃石竹を被 石竹は美女の事人をなすや

そよりて時主伴乃石を射則 箭そら平

主薬 雪ふりて咲そう 咲花

おれそもそもそう咲そ

庭古草

栖

（天智天皇の御代の事なり）
柱をし立てし其日の座吉事（むべ）

苔草

（秋之夫の御代の事なり）
代ごとに宿あまた結むすべる苔

秋待草

（秦の後帝）
水まさる秋まつ草のかりがねを

水懸草

（乳母天智天皇の御代の事なり）
こぐらく吾田も秋ま近みて

池辺草

同

まをぐいも苞もらん浪波まて

蓮

同

庭堪草

水堪草

同

苞さゝ浪もみん堪

（末れハ五月雨の比乃事
をいふる象なり）

庭堪草

（後敏二帝）
五月雨もまれを堪らん座堪草

蓍草

松

（秦の後帝）
住吉や遊ぶあそびの五位乃松とゝ書ける被

松ならぬ遠里小野も現しめすべき

菊とめで〳〵おほくうへけるを彼翁こゝろをきゝ九月をまちてすこし菊の苗共数ものなき所にうつしうへ菊をもて義尊と号し松乃矣名と妻部ハ被文事未完得仮彼義と現せし事五月あやめ仍妻入元妻松後頼朝卿住吉詣の事ども書しるしきくの人形の風やねり(てい)人

水室草　葦

雛菊(天智天皇ゟ起て天名)　ひめ〳〵とよなる小ぎくの苗代ゝ水かゝるなり

吹毒草　葛蒲(あやめ草の本統古今注実ハ違)

大団や(乃歌)ゑんぐりめやくさおほし

光草　姫百合

日　夏乃くも心ありけり今ゆきてまたるゝ事いと後ぐるゝ草

是をもめ草ともいふ

備前なり両代〳〵ゟ書乃事をうけて同事とゝ僻事なり

火借草

日　夜ともゆかしの浦乃波の火借草月あるあまのやどをたづねよ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

よろづの草よりさきに川乃字
不加見草
万葉 名をおもはしめても草
且見草
[訓] みちしばあさのこと
頭仲宇 新人のこころもとなく
名乃知草
杜丹
[訓] 杜若 比毛久日数廿日也俗廿日草也次
玉蔦
むつまじある女氏花を愛しおもひ人を思
て夏八朔日より九月廿日頃迄夜風寒
可捐事と歎きるよりよく男依あ

里とく離別くうき器なる花より時ありさて
うとみてくすこもあるとも仍名乃草
号
夜白草
天宝天皇之諱字也 無乃田小雪とも冬次葉
花をおもんとする根統あり大に未審以下の
ら簡
以前草
大蘭草
[訓] いちごさうなる花ひけりの花ともに雪とみる
数ら里草
小蘭草

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

秋

初見草　萩

天智天皇御製　秋の野のみ草刈り葺き宿れりし宇治の仮廬し思ほゆ

松風

同　秋萩の枝もたわわに置く露の消ぬべくも我は思ほゆるかも

扇

同　手に取れば袖さへにほふ女郎花この白露に散らまく惜しも

風宇草

詠人名を失ふ　こもりくの泊瀬の山の山の際に鳴くなる鹿は妻恋ふらしも

風副草

同　秋萩の散り過ぎゆけば我が宿の浅茅が末に鹿鳴くなり

風宇艸

詠人名を失ふ　こもりくの泊瀬の山の山の際に鳴くなる鹿は妻恋ふらしも

風副草

同　秋萩の散り過ぎゆけば我が宿の浅茅が末に鹿鳴くなり

萩

天智天皇御製　秋の野のみ草刈り葺き宿れりし宇治の仮廬し思ほゆ

古枝草

同　秋萩の枝もたわわに置く露の消ぬべくも我は思ほゆるかも

扇

同　手に取れば袖さへにほふ女郎花この白露に散らまく惜しも

秋歌

同　秋萩の散り過ぎゆけば我が宿の浅茅が末に鹿鳴くなり

紅葉草

同

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1　　ガラス使用

（井文武名）
花さそふ
（二条院御時）
嘉応四年
我宿の庭はまがきも
（後鳥羽院御作）
紅葉鳥
（天智天皇花実二名）
物思へば
秋和草
（井文武名）
秋さらで
山下草

薄
（二条院御作）
露の雫草
（井文武名）
萩
（萩を雷となづく井文武萩名）
雄鹿の
（天智天皇花実二名）
袖のうち
藤袴草
（井文武名）
秋和草

同
（二条院御作）
秋さらで
（井文武名）
老の袂

同

（敏達天皇）
小竹葉
（堀河院御時）
（井文武名）
風持草
（秋雲花実二名）
さをしかの

同

男草
（堀河院御時）
（井文武名）
立ち添ひて
（二条院御作）
秋風

同

（家隆卿）
秋ごとに
（二条院御作）
青丹よし
讃岐内侍

同

同

同

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

也猶をゝろかなるこゝろ
ばえなり

濃露草

（天智天皇御製と吳名）
秋の野のくさ葉もわけぬ袂哉

竜雄第

（天智天皇御製と吳名）
秋の野のくさ葉もわけぬ袂哉

松意第

（天智天皇御製と吳名）
春見れば秋の草葉も花もなし秋見る時ぞ春の恋しき

庭志葉　芭蕉

（同）
吹風の雲や峯より庭に来ん

夕顔草　檍

（同）
名月や池をめぐりて夜もすがら

鏡草　同

（表俵子）
明ぬとてかへるあしたの雁がねは

思帥

きぬ〴〵の別路に鳴く鳥の

如泉第

（天智天皇御製と吳名）
秋の野のくさ葉もわけぬ袂哉

（表俵子）
明ぬとてかへるあしたの雁がねは

（同）
名月や池をめぐりて夜もすがら

（同）
吹風の雲や峯より庭に来ん

（芭蕉）
庭志葉

（檍）
夕顔草

（同）
鏡草

思帥

きぬ〴〵の別路に鳴く鳥の

如泉第

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

（以開拓者を掲げる）
奉為おを思仲こつ事八帝院せひこい事を
小こそそり乞智天皇草名異名ハ蔭と
施り又志をんこそ不分的但女郎花を思
草こそのを被為載令小宝らおく条勿論
なるま又楓とも能周法師を係せり
恋草　　葦
（御門院天名まつ）
紀葉中へ毛こそ恋草こ代恋草
つそ是仲の事新嫡生生ま志者の者
りまこと又くそ恋草とい
ら後頼を楓をそもよう

（秋勤後拾）
去こ奉のりさをを令八恋草風ちハ令あ住
色見草　　紅葉
（頃法院中宇）
秋こいやもくそ志ら是仲ちる風く楷こ山風毎く
妻恋草　　同
（月）
そくこくこくるくそなく廉八妻こ八妻れこいもおらも
錦草　　同
（月）
立田山妻代をそ志ま河毛くる雨ちる山八横雲
百夜草　　菊
（天智天皇花を英名）
名りくこ坪こ義う庭乃百歳くそも咲てそ白ありるれ
大和ま三梅の里に翁あり彼庭を一本乃

萩と桔梗
もろく春夏ゆきて秋冬
ふるく春夏ゆきても花を
不審しく春夏ゆきても花を
菊乃下露と器物
毎月此花を並植
菊
萩
水懸草
みそさゝ
雑草
ふやおもひ
庭満
ねさゝやわらと
星見艸
菓
竹
落
萩見草
日
めもと
秋と

花瞿麦
今日こゝ
七月廿日水
瞿麦
月
竹露
川辺草
秋
波
天竺瓦
秀
風
波
落
萩見草
日
めもと

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

[illegible]菊を興別新妻里[illegible]
新妻こふ物語[illegible]
[illegible]つゝく燈[illegible]
日[illegible]

冬

初更草

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

霜見艸　同

[illegible]代為[illegible]
[illegible]

雪見草　同

西行哥
[illegible]

秋香草　同

夫木和哥抄作[illegible]
[illegible]

初名艸　冬郡

[illegible]

鏡草　海草

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

水面鏡 宇治川の歌よみ侍りけるに、おなじ心を
親子草 よめる 素覧
年ふれば老の波よるおやまくさ 雪
六、花 師光守
春風もなごりなき世の花の雲 素覧
六、花の事 要和尋新編
二、梅 桜をより則三冬雪姫を一集 義和
雪あらぬ人にもそへてさくら人や 素覧
花ちりはてぬ

雑

豊秋谷草 松
天智天皇崩御之時 川なりきさたくつ歌當社ことを
雲る代第 同
日 松乃こやうへる時を来てくみ 同
延喜草
日 春のや雪を集れ沢乃ま第 同
夕見第
日 生川を雪をこぶをつくつ 同
朝見草
日 秋おもふ風を待をや乃朋を第 同

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

折見草　同

日　そこともわくらはにやあらんとそ折見つる野辺の秋萩

時見草　同

日　なかめつるもとけぬ間に時見草

物見草　同

日　見てくさ袖もぬるくむすぶらん露をそ花とおもへとも

目覚艸　同

日　山里の暁ことの雲間より露やそ降ると目覚艸哉

寝覚草　同

日　何をさとめ種とそ夢の覚艸

悪草　同

日　手折なとうき事やあらん悪草の種とハ神のおもふこと成らん

問速草　同

日　月ふるもまたハ初霜なき間にも問速草まかきそこ或ハこゝく

丸草　同

日　丸草とい捨る事莫れ或ハ人を或ハ物をひきとゝめ或ハ物乃種と

多教草　同

日　多教草をそ皆なつふ文字をそなるらん

それと迎来ておくれ先立ても有るらん

異名

河隈名
若野草　桜　日　匂草　桜
日　河そひ草　柳　日　墨草　松
日　常盤艸　松　日　富草　橘
日　曙草　桜　日　かさ草　日
日　風向草　日　玉見草　萩
蒿草　稲
日俗ニうへ　あぜ　ぐろ　小田ま神ぬまく　家苑さゝ人つ乃ゑを
秋代の稲　社名天神乃御田あまの里なる田ま
をさ社をの尊乃まのあらまつ乃ゑを時の
稲乃名あま社をく草ぐ

日　風待草　日
日　龍田草　紅葉
日　幸草　日
日　文見草　萩
日　萱草　桜

河隈
日　若木乃草　乃名
日　志のゝ草　檀
日　千代見草　菜　日　ようそひ草　日
日　葵草　日

むつ陸奥国ま見守ゐつゝ
て生ゐ蒔草へ好ゐつゝ五名称を指ゝ別ま
き数附見庭前乃菊を二本ゐつゝ
無つゝむおゐ小ま代菜ゐなゝくも
しとゐそゐつゝ生蒔菜へを抜ゐつゝ
けきくとゐくけま社菜二ゐつゝ

藪胡ごまの乾たるを粉にしてもちひの粉にまぜ
るもよろし毛の細きを藪胡ごまといふ

なり山秋の末より咲花白し

おひうねおく葉のさまを姫ゆくりといふ深山にあり

嶋あをすとく淋しくしげりあひ山路などにおほし

きすわく藥 きれはきすのこと花をきすごといふ

和名抄に論抄 蓋 ふのみ蓼のたぐひなり

さゝびこ草 集

さゝびこぐさ 萬葉抄

ほく柱 竹柱

きゝやう抄に土あり

蓋 さゝ 紫 やきゝ紫色なり馬乃毛と云田うゑをいとなみ種まくころ花さく

日

歳の葉 歳初文 萬葉

きゝやう抄

生ふるしき柚 和名抄 柏ろ 柚や

ふのりもの 畠

ゆふこ山の志ろゆふもしばゝ

歌名所

ゆふつも 稲妻の事

日

天のさゝ橋 月性天門渡橋 橋ろ六日夜也

日

さゝれ石 秋名

志陽ろ月

さゝ蛇 浜名

ゆふこ山

ゆふつけつゝ 春物

あさ生の川 春物

うちこけむ苔

ものやたゝ 古堂

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

安葉葉ごとに
あつく梅雪 あつて今年 防免雪 ふる雪
牧法坊にて
みてくれく 葬墟 梅つぼ苑 冬梅
の事
里舟車
毛葉ごとに
あちむらごと 処 初日 ㊊ 筆
心使 筆 ㊐乃統 日
じの事ごとに物語ごと集式ごと作
ゆきの人
十二月異名 後鳥羽院御時十二月異名
年村苑香隆冬ごと雪用ごと畧く
正 柳営 初会 厚 霧 物月
御製
自万葉集出
雪ながら枝もたわゝに降しきて
㊐人 仗
大佐
あしろ玉 車
武佐ごと
石便 視
死去ごと伝聞ごと
心の湊 視
ふたりしま 墟のごと
又ふたごと
ふさく 免 みまごと
ふたごと

㊐ 今日毛杖ごとに
家隆
㊐ 霞立物ごと月の朔日歌のごと
二 接 旅 梅ごと月 小弟生月 哀更ごと
㊐ 有家
ごと人毛なき苑乃梅ごと香毛
顕昭
㊐ 日本紀 梅ごと歌毛小弟生月
㊐ ごと姫乃ごと日歌毛ごと月

三藤雲庵　花見月　探月　春惜月

万　うら波、墨ぞめそひとしの乃ゑ
　　御製

日　ちりてのち今歟と見てそ探月
　　定家

日　数ならぬ身のそれも恩ぞ今見ぬる
　　元春

三月と春こそ
　　得登叔月　花残月

四郭公郭公　卯花
　　長明

日　ちりのこる花を数ふる九重の
　　定家

日女院　春ぞ行ゆく山ぢの花の
　　定家

五栖多寺　賤男深川
　　吹喜月

日女院　いくしほの苔ぬとそ
　　顕昭

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

（万）
雪月花時最憶君

（月）
雪月花時憶故人

（月）
雪月花時憶故人

（月）
雪月花時憶故人

月 萩乃葉も色ふかくみえそめて秋の
月 名のみおもく秋乃末の空
月 もくれつそれも秋をおもふ葉の
秋三月乃中そらまつ
九 紅葉月
月 立田山もみちまくもくるゝやおもの月もとゝ

家宣

長明

有氣

小田切尹

法製

月 ちゝ〳〵さゝ鳴こゑ當乃家もたゝ袖おそらふ小田切の月

家隆

十 菊 月

月 いく度うつる松乃秋とや

源有房

拾月

月 ひさまてふ春冬ゝめし何を指

長明

秋乃あそうまめ指月

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

日 第七未申初第四月の朔癸酉
十一 ゆきたん 子島 霜降月 神無月 第六月
日 風雲天象の月氷雪の
御製
日 志ら菊をよく賞翫の秋
宝歌
日 くもりなき月をや雪にみるべくも初しも
三 梅 誓 春初月
日 暮て行年の名残を夜もすがら春立月を
顕昭
日 花ならぬつもり枝と梅の花
定家
雪ふる時をよそふ春の
のこり
冬十月の中壮月を冬と号
北外月異名雅之多世諺美名者自日
奉紀莫百葉集勅
皆以證哥不分明之
旨

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

127
666
1

此一巻者自室町殿御草木異名事後紋
尋申被註進清書之時密寫留ものゝ為
有限閑者可為生涯更不可出懐中也

右藏玉和歌集 坂原萬所藏草校合了

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

127
267
1

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1